

「FIAFサマースクール2007」報告(上)

板倉 史明
Fumiaki Itakura

連載: フィルム・アーカイブ の諸問題 第62回

2007年5月から7月までの約3か月間にわたり、国際フィルム・アーカイブ連盟 (FIAF) が主催するフィルム・アーキビストのための研修「FIAFサマースクール2007」が実施された。6月30日から7月28日の期間は、世界中から28名のアーキビストがイタリア・ボローニャにある復元専門の現像所「イマジネ・リトロバータ」に参集し、フィルム復元の実習をおこなった。本サマースクールに参加したフィルムセンターの研究員が今号から3回にわたって報告してゆく。

FIAFサマースクールは1973年以降、2-5年の間隔で実施されてきた。過去の2回は、1998年と2002年にアメリカのジョージ・イーストマン・ハウスがホスト役を務めたが、第11回目にあたる今年のFIAFサマースクールは、ボローニャのフィルム・アーカイブ「チネテカ・ディ・ボローニャ」と、その一部門である現像所「イマジネ・リトロバータ」(もともと独立した現像所であったが2006年7月にチネテカの一部となった)がホスト役となった。

チネテカ・ディ・ボローニャといえば、1986年以降、毎年開催している「復元映画祭」(IL CINEMA RITROVATO)を主催するアーカイ

ブとして、また、チャールズ・チャップリンの資料をスキャンおよびカタログリングしてウェブ上で公開するという「チャップリン・プロジェクト」を進めているアーカイブとして有名である(そのほかP・P・パヴリーニ監督の膨大なコレクションも収蔵している)。また、イマジネ・リトロバータはアナログ/デジタル両方のフィルム復元に対応できる「復元」に特化した現像所として、ヨーロッパでは著名な現像所のひとつである¹⁾。

今回のFIAFサマースクールはテーマを「フィルム復元」に絞ったもので、フィルム復元の倫理や哲学といった理論的な側面だけでなく、フィルムやプリンターやスキャナーなどに実際に触れて操作するという実践的な側面も充実していた。主催者側によると応募総数は100名を超えたという。選考の結果33人の受入が発表されたが、その後辞退者が数名でため、最終的な参加者は28名になった。参加者の出身国(人数)を挙げると以下の通りである。

イタリア(3)、フランス(3)、スペイン(3)、ドイツ(2)、中国(2)、ルクセンブルク(1)、スウェーデン(1)、ノルウェー(1)、ブラジル(1)、日本(1)、アメリカ(1)、フィンランド(1)、オランダ(1)、スロヴェニア(1)、チェコ(1)、南アフリカ(1)、イスラエル(1)、台湾(1)、タイ(1)、オーストリア(1)

やはり開催国のイタリアやその近郊国からの参加者がもっとも多かった。アジア圏からは筆者のほか、中国電影資料館(北京)、香港電影資料館(香港)、国家電影資料館(台湾)、タイ・フィルム・ファウンデーション(タイ)からの参加があった。ほとんどの参加者は各国・地域のフィルム・アーカイブに所属しているアーキビストであり、フィルムの保存や復元を専門とする

キュレーターから、フィルムの焼付や現像を管理する技術者まで多様な顔ぶれであった。年齢層は20代から40-50代まで幅広く、男女比は15対13とほぼ同数であった。

今回のサマースクールの内容は以下のような3つのセッションから成り立っていた。

- (1) ウェブ・メール (Gmail) を活用して、フィルム保存や復元に関する基本文献を参加者が読んでゆく「ディスタント・ラーニング (遠隔地学習)」。 (5月2日-6月29日)
- (2) 各国のアーカイブで近年復元されたフィルムをまとめて上映する「復元映画祭」への参加と、フィルム復元に関わる専門家による講義および討論。 (6月30日-7月7日)
- (3) イマジネ・リトロバータにおけるフィルム復元の実習。 (7月9日-7月28日)

(1) 遠隔地学習

約2か月(9週間)にわたった遠隔地学習は、毎週1回、指定されたウェブ・メール (Gmail) のアカウントに参加者がアクセスし、そこに保存されている論文のPDFファイルをダウンロードして精読するというものであった。以下、配布された9つの文献を配布順に紹介する。

- 1) Alfonso del Amo García, *Preservación Cinematográfica* (Cineteca Nacional de México, Filmoteca Española, 2006).
元・FIAFテクニカル・コミッション委員長のアルフォンソ・デラーモ・ガルシア氏が中心になってまとめた、フィルム・アーキビストのための入門書。参加者に配布されたのは英語版(抄訳)であった。豊富なカラー写真でフィルムの素材・構造・特性等のさまざまな基礎的情報を提供してくれるほか、フィルムの安全な保存方法等についても詳しく解説している。

- 2) Dan Nissen, Lisbeth Richter Larsen, Thomas C. Christensen, and Jesper Stub Johnsen (ed.), *Preserve Then Show* (Danish Film Institute, 2002).

デンマーク映画協会が2002年に出版したフィルム保存および復元の研究書。急激な温度変化によって起こるフィルムとフィルム缶の結露の問題をあつかった論考や、可燃性フィルムの最適な保存環境を論じた論考など、豊富な



チネテカ・ディ・ボローニャの正面玄関(昔はタバコ工場だった)。向かって左側の1階と地下にイマジネ・リトロバータが入っている。



チネテカの図書館と上映ホールが入っている建物(手前の写真機は映画祭期間中のみ一時的に設置されていたもの)

科学的データをもとにした説得力ある論文が多数掲載されている(デンマーク映画協会のホームページから購入することが可能)。

3) *The Film Preservation Guide: The Basics for Archives, Libraries, and Museums* (National Film Preservation Foundation, 2004).

アメリカの国立映画保存基金が作成したフィルム保存の手引書。フィルムの特性、検査(インスペクション)の仕方、複製物の作成方法、そしてカタログリングとアクセスの問題まであつかったもので、フィルム・アーカイブの仕事全般についての包括的なマニュアル本とも言えるが、副題に示されているように、フィルムを収蔵している図書館や博物館などの機関にとっても参考になるものである。なお、このガイドブックは国立映画保存基金のホームページ(<http://www.filmpreservation.org/>)中の「Preservation Basics」欄から無償で閲覧することができる。

4) Paul Read, Mark-Paul Meyer (ed.), *Restoration of Motion Picture Film*, (Butterworth-Heinemann, 2000)

数多くのアーカイブや現像所などでフィルム保存や復元のコンサルタントを勤めているポール・リード氏が共同で編集したフィルム復元の代表的な研究書。フィルム復元を行う際の各プロセス(フィルムの補修、焼付、グレーディング[タイミング]、現像、色の復元、音の復元、そしてビデオとデジタルデータの修復など)が詳細に解説されている。巻末の用語集も入門者にとって参考になる。

5) *Tutti I colori del mondo: il colore nei mass media tra 1900 e 1930 / All the Colours of the World: Colours in Early Mass Media 1900-1930* (Edizioni Diabasis, 1998).

映画における色の復元に特化した論文集で、とりわけ染調色(tinting & toning)フィルムの復元について考える際の基本文献のひとつ。欧州のフィルム・アーカイブが協力して生まれたヨーロッパ・シネマテーク協会(ACE)内の「ガンマ・プロジェクト」という研究グループの成果で、1997年の「復元映画祭」における討議内容がベースになっている。通常のカラープリンターで染調色の色彩を復元する方法を提唱したノエル・デスメット氏による「デスメット・カラー」の解説や、無声映画期当時の染色技術を用いた染色の試みに関する論文などが掲載されている(なお、サマースクールの実習ではデスメット氏本人がデスメット・カラーの実習を指導した)。

6) *Faol-Film Archive on-line: Training for Film Restoration* (GAMMA group, 1997).

フィルム・アーカイブや現像所でフィルム復元を担当するひとたちのために作成された教科書的な書物で、同じくガンマ・グループが3年をかけて完成させた(配布されたのはその一部)。フィルムの検査・補修・クリーニングなどに必要な関連器具・機器の説明や取扱い方法など、初歩的かつ実践的なことが丁寧に解説されている。

7) *Cinegrafie (Cineteca del Comune di Bologna, 1989-)*.

チネテカ・ディ・ボローニャが1989年以降発行している研究誌『チネグラフィエ』(現在第20号まで発行されている)の各号から、FIAFサマースクール2007の主催者が独自に抜粋した11本の論文で、おもに個別の映画復元プロジェクトに関するケース・スタディが選ばれている。『日曜日の人々』(1929年、エドガー・G・ウルマー、フレッド・ジンネマン他監督)、『ファウスト』(1926年、F・W・ムルナウ監督)、そして『女優ナナ』(1926年、ジャン・ルノワール監督)などの各復元プロセスをたどることによって、フィルム復元の倫理的・技術的問題が浮かび上がってくる。

8) *The Vinegar Syndrome Prevention: An Handbook Remedies and the Use of New Technology* (GAMMA Group, 2000).

こちらもガンマ・グループが2000年にまとめたもので、アセテート・フィルムの劣化現象「ビネガー・シンドローム」に関する包括的な研究書。映像/音声の記録メディアの保存研究を積み重ねているイメージ・パーマネンス・インスティテュート(IPI: ニューヨーク州ロチェスター、1985年設立)の研究員が、科学的なデータに基づいたアセテート・フィルム劣化の諸問題と対策を論じている。本書の後半はビネガー・シンドロームに対する各フィルム・アーカイブの取り組みについてのケース・スタディ。

9) *The FIRST Project's Final Report* (Royal Film Archive, Brussels, 2004).

2002年から2003年にかけてACEとベルギー王立シネマテークが共同で実施したプロジェクトの最終報告書(「FIRST」は*Film Restoration and Conservation Strategies*[映画復元と保存の戦略]の頭文字)。内容はフィルム・アーカイブが近年のデジタル技術に対していかなる態度で臨んでいくべきかという、現在進行形の大きなテーマを総合的に検討したもので、デジタル・データの適切な保存方法か



図書館内部

ら、フィルム復元時のデジタル技術の活用法、そしてデジタル・データのカタログリングやアクセスの問題まで幅広く検討している。

もちろん上記文献のほかにもフィルム保存/復元に関する数多くの重要な文献が存在するが、FIAFサマースクール2007が選択した上記の文献は、今後フィルム保存や復元を学びはじめるひとたちにとっての基本文献になることは間違いない。フィルム保存や復元に関する最新の研究動向や重要文献については、これまで本誌で紹介したり、翻訳を掲載してきた(「ビネガー・シンドロームの猛威」15・16号、「無声映画の「適正な映写速度」とは何か?」17号など)。フィルム・アーカイブだけでなく、博物館・図書館・資料館などにおいてアセテート・ベースの(マイクロ)フィルムの劣化が顕在化しつつある今日、フィルムの適正な保存環境や保存方法をはじめ、劣化フィルムの復元に関する情報のニーズは高まっている。日本語で読むことの出来る関連文献が限定されている現在、フィルムセンターとしてはこれまで以上に海外の関連文献を日本語で紹介してゆく必要があるだろう²。

なお、上記の参考文献のうち、2)から4)はフィルムセンター図書室にて閲覧可能である。それ以外の文献は、PDFファイルをプリントアウトした版を同図書室で閲覧することができる(2008年3月まで)。

次号に続く

(フィルムセンター研究員)

註

- 1 おもな機材として、白黒ステップ・プリンター(トータル・エマーソン、CTM社製)、カラール・コンタクト・プリンター(ドライ、Bell&Howell社製)、フィルム・クリーニング機(Lipsner-Smith社製)、白黒とカラーの現像機、テレシネ機、デジタル・スキャナー(Cintel社製)、画/音の修復およびカラーコレクションのためのソフトウェア(Revival、Pro Tools、Final Cut Pro、Scratch)などが設置されていた。
- 2 2007年8月31日現在、映像・音声の保存と復元に関する最重要文献のひとつである、レイ・エドモンドソンの『視聴覚アーカイビング: その哲学と原則』(ユネスコ、2004)の日本語版が、NPO法人映画保存協会のホームページ上で公開されている(放送番組センター翻訳、NPO法人映画保存協会監訳)。